

児童の自尊感情をはぐくむ道德の時間を旨して

－「心のアンケート」を活用した道德の授業づくりの工夫－

松 浦 睦 美

「心の教育」の重要性が叫ばれている今、子どもたちの自尊感情の低下が指摘されている。自尊感情は、自分を価値あるものとして肯定的に認め、ありのまま受け入れる気持ちである。自尊感情の育成は「豊かな人間性」の基盤づくりである。

本研究では、まず、自尊感情を調査するため「心のアンケート」を作成した。そして、その結果分析から自尊感情をはぐくむ授業づくりについて考察し、授業実践を試みた。その後再び「心のアンケート」を実施して、児童の自尊感情の変容を分析した。

その結果、「心のアンケート」を基にした授業づくりが、児童の自尊感情を高める上で効果があることが分かった。また、児童の変容をとらえる上でも役立つことが分かった。

〈キーワード〉自尊感情、「心のアンケート」、道德の時間、授業づくりの工夫、児童の変容

I 主題設定の理由

自尊感情とはself-esteemの訳語であり、ありのままの自分を肯定的に認め、自分に自信をもち、自分を価値あるものとして誇ることができる気持ちである。子どもたちの行動の基礎となり、自己実現に向かう基盤となる感情である。

自尊感情が高い子どもは、自分だけでなく他者の価値も尊重して行動することができる。また、困難な場面に出会っても、乗り切っていこうとする強い意志と行動力をもつことができる。自尊感情を高めることは、社会の変化に主体的に対応してたくましく生きる力や他者と豊かな人間関係を築く力、すなわち「生きる力」を育成するための基礎づくりであると考えられる。

しかし、学校生活の中で子どもたちと接していると、「自分には無理」「どうせ自分なんて」という言葉をよく耳にする。問題行動や不適応等を起こしている児童に限らず、自信がなく自分を否定的にとらえている子どもが多くなってきているように感じる。すべての子どもたちが、自分がかけがえのない一人の人間として大切にされ、頼りにされていることを実感でき、存在感と自己実現の喜びを味わえるようにしていくことが大切である。

道德教育は、小学校学習指導要領「第3章道德」の「第1目標」によると、「学校の教育活動全体を通じて、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養うこと」を旨している。そして、道德の時間の目標として、「各教科、特別活動及び総合的な学習の時間における道德教育と密接な関連を図りながら、計画的、発展的な指導によってこれを補充、深化、統合し、道徳的価値の自覚を深め、道徳的実践力を育成する」ことがあげられている（文部科学省 1998）。

さらに、道德の時間は、「児童の立場から見ると、各教科や特別活動、総合的な学習の時間などで学習した道徳的諸価値を、全体にわたって人間としての在り方や生き方という視点からとらえなおし、自分のものとして発展させていこうとする時間」とされている（文部科学省 1999）。子どもたちの心を育てることを直接の目的としている道德の時間において、自尊感情を育成するという視点をもつことが重要であると考えた。

本研究では、対象を小学校高学年児童とし、その自尊感情を調査するため「心のアンケート」を活用する。その結果分析から、どのような道德の授業づくりが効果的であるかを考察し、授業実践に役立てることで、児童の自尊感情を高め、よりよく生きるための道徳的実践力を身に付けさせることができると考え、本主題を設定した。

II 研究の目標

児童の自尊感情を調査するため「心のアンケート」を活用し、自尊感情の育成を目指した授業実践を行い、児童の自尊感情がどのように変容するかを明らかにすることによって、よりよい道徳の時間の在り方を探る。

III 研究の方法

1 「自尊感情」についての考察と「心のアンケート」の作成

先行研究から「自尊感情」について考察し、それを調査するための「心のアンケート」を作成する。

2 「心のアンケート」の分析と授業づくりの考察

「心のアンケート」を実施し、その結果を分析して、自尊感情を高めるためにはどのような授業づくりをするとよいかを考察する。

3 自尊感情を高めるための授業実践と児童の変容の分析

- (1) 授業実践を行い、それぞれの実践における発言や感想を基によりよい授業づくりについて考察する。
- (2) 授業実践後の「心のアンケート」から児童の変容を分析し、「心のアンケート」を基にした授業づくりの有効性を検証する。

IV 研究の内容

1 「自尊感情」についての考察

(1) 自尊感情の概念

遠藤(1992)は、「セルフ・エスティーム(self-esteem)とは、人が持っている自尊心(self-respect)、自己受容(self-acceptance)などを含め自分自身についての感じ方をさしている。自己概念と結びついている自己の価値と能力の感覚-感情-である」としている。自尊感情の研究は、self-esteemとして、また、自己についての研究の一部として多くの学者によって取り上げられている。遠藤は、多くの点で一致した見解が見られず、方法も結果もかなり異なっているとしながらも、次の六つの視点をあげ、これらの諸問題を明らかにすることが自尊感情の研究において重要であると述べている。

- ① self-esteemは、個人による自己の価値についての認知であること
- ② このような認知は、自己評価であるが、それは、「重要な他者」を含む人間関係の中で形成されるものであること
- ③ self-esteemは、社会的環境の変容によって変化を受けるが、反対に、self-esteemの変化は、社会的環境を変化させるものであること、あるいは、比較的永続的なものとそうでないものがあるのではないかということ
- ④ 個人におけるself-esteemには、異なる領域があること
- ⑤ self-esteemとパーソナリティ特性とは関係があること
- ⑥ self-esteemの性・年齢・文化による差異、あるいは発達のプロセスにおける共通点あるいは差異があること

本研究では、特に①②に着目したい。また③④についても、自尊感情のどの領域を重点的に授業の中で取り上げるか、そして授業後にはどの領域が変化するのか、逆にどの領域が永続的で変化が見られないものなのかを明らかにしたい。さらに⑥について、高学年の児童という発達段階を考慮しながら、授業づくりを工夫していきたいと考えた。

(2) 自尊感情をどうとらえるか

セルフ・エスティームの研究者であるジェームズは、自尊感情を「自己評価の感情」、すなわち、

自己に対する満足および不満足としてとらえている（遠藤 1992）。自尊感情はメタ認知であり、自己を見つめる心の動きであるといえる。

自己を見つめる心の動きには、二つの方向性があると考えられる。一つは、「自分から見た自分」を評価する心の動き、すなわち、自分が自分自身をどのように認識しているのかということである。自分はこんなことをがんばっている、自分にはこんな能力がある、こんなことができるようになったなどという気持ちである。

もう一つは、「他者から見た自分」について評価する心の動きである。これは、みんなから価値ある人間として認められている、みんなは自分の気持ちを分かってくれているというような思いである。

そして、この二つの方向から自分を見たときに、自分を価値ある人間だと感じ、よいところも悪いところも含めて、ありのままの自分を受け止めようとする心の動きが生まれる。この一連の心の動きが「自尊感情」であると考えた。

このような考えから、子どもたちの中にはぐくんでいきたい自尊感情を、次のような10の領域に分けてイメージしてみた（図1）。

自分から見た自分について

自己充実感…現在の自分は充実していると感じている。

自己効力感…自分は努力すれば達成する能力をもっていると感じている。

自己成長感…自分の成長を評価できている。

自己決定感…自分の将来に向けて、充実した気持ちをもっている。

他者から見た自分について

自己有用感…自分は、他の人のために役立つ人間であると感じている。

自己存在感…自分は、集団の中で価値ある人間として認められていると感じている。

他者からの受容感①…自分は、集団の中で受け入れられていると感じている。

他者からの受容感②…集団の中で安心して自己開示できると感じている。



このような自分について

自己肯定感…自分に対して肯定的な評価ができている。

自己受容感…悪いところも含めて、自分をありのまま肯定的に受け入れることができている。

(3) 自尊感情と道德教育とのかかわりー自尊感情を高めるためにー

小学校学習指導要領解説道德編第1章第2節道德教育の基本的な在り方の1道德の意義には、「道德は、自らを見つめ、自らに問いかけることから出発する」と記されている。さらに、「より積極的な自己像を描き、未来に夢と希望をもって力強く生きようとするところに主体性が確立され、自律的な人間が形成される」とある。道德の時間に自分を見つめ、自分のよりよい生き方について考えることは、自尊感情を高めていくことと密接に関連している。

また、「他者とのかかわり」「様々な社会集団とのかかわり」など、「かかわりを深めることを通して、道德性を育成していくことが求められる」と記されている（文部科学省 1999）。他者とどのようにかかわるか、どのように受け止められていると感じているかということは、子どもたちの自尊感

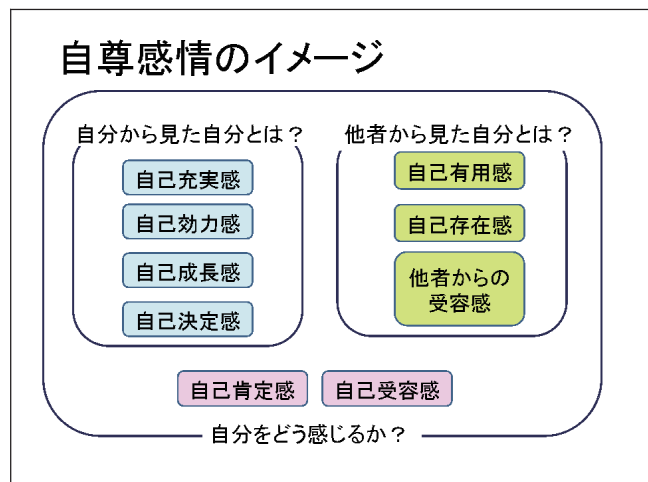


図1 自尊感情のイメージ

情に大きな影響を及ぼしていると考えられる。

そこで、道徳の時間において自尊感情を高めていくためには、肯定的な自己評価を体験する場と他者からの受容を認識する場を設定していくことが重要なのではないだろうかと考えた。

① 肯定的な自己評価を体験する場

肯定的な自己評価を身に付けるためには、自己を見つめる際、数多くの視点をもつようにすることが必要である。現在の能力だけでなく、自分の努力、成長したこと、将来への意欲をもっていることなど、自分を様々な角度から見つめる場面を設定することで、今まで気付かなかったよいところに気付くようになるであろう。

道徳の時間においては、資料の主人公やゲストティーチャーなどのよりよく生きようとする姿に児童が共感できるようにすることが大切である。その中で、自分も同じような気持ちをもつことがある、自分にもこんなよいところがあると気付くのではないかと考える。

また、授業の中で自分の成功体験について話し合ったり、自分のこれからの思いについて発表したりする場面を意図的に盛り込むことが大切である。自己を肯定的に見つめ、希望をもって将来を思い描く体験を、学級で共有することが重要であると考えます。

② 他者からの受容を認識する場

自尊感情を高めるには、「重要な他者」からの受容であることが大切であると考えます。

高学年の児童にとっては、まず友達とのかかわりが重要であると思われる。友達から認められ、受け入れられているかどうかには敏感な年頃である。ふだんはお互い口にしなないそれぞれの思いを伝え合う場面を設定することで、友達の受容に気付き、その評価を受け入れるようになるものと考えます。

次に重要な他者として、家族、とくに両親の存在が大きいと思われる。個人差はあるものの、高学年の児童は、思春期にさしかかり第二反抗期の入り口に立っている。両親の思いに耳を傾けたり、すなおに表せない思いを両親に伝えたりする活動を設定することが有効であると考えます。

さらに、教師のかかわりが重要であろう。教師は、日常的に、学校生活のあらゆる場面で児童を評価し、それを伝えているはずである。道徳の時間においても、児童の思いを肯定的に受け止めることが大切である。繰り返し、「よいところに気がついたね」「しっかり考えているね」「正直に話してくれたね」「〇〇さんのそういうところが大好きだよ」「いつも〇〇できるのは、こんな気持ちをもっているからだね」などの言葉を掛けることで、児童が、「自分は認められており、能力のある価値ある人間である」という思いをもつようになるものと考えます。

2 「心のアンケート」の作成

(1) 「心のアンケートⅠ」(図3)

児童の自尊感情を調査するものとして、荒木(1999)が示す「小学生自尊感情検査」29項目、「中学生自尊感情検査」9項目を参考に「心のアンケートⅠ」を作成した。4件法を用い、「とてもそう思う」3点、「そう思う」2点、「あまりそう思わない」1点、「全くそう思わない」0点として換算し、自尊感情指数として数値化した。

また、質問の前書きとして次の言葉を活用した。

これはテストではありません。自分がどう思うか、どう感じるかということなので、正しい答えやまちがった答えというのはありません。あまり深く考えずに、感じたままを答えてください。(荒木 1999)

このことにより、児童が、緊張せずにリラックスして、正直にありのままの自分を見つめ、心を開いて答えることができるのではないかと考えた。

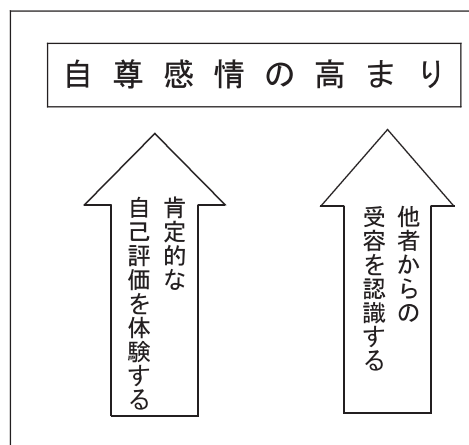


図2 自尊感情を高めるには

さらに、前述の「自尊感情の領域」のそれぞれをよりの確に調査するため、児童に分かりやすい文章表現となるように考慮しながら質問文を作成した。

自己肯定感（自分に対して肯定的な評価ができています。）
→自分にはよいところがあると思う。

自己充実感（現在の自分は充実していると感じています。）
→がんばっていることがある。

自己効力感
（自分は努力すれば達成する能力をもっていると感じています。）
→自分には、がんばってやり通す力があると思う。

自己成長感（自分の成長を評価できています。）
→できるようになったと思うことがある。

自己決定感
（自分の将来に向けて、充実した気持ちをもっている。）
→これからがんばりたいと思っていることがある。

自己有用感
（自分は、他の人のために役立つ人間であると感じています。）
→自分はまわりの人の役に立っていると思う。

自己存在感
（自分は、集団の中で価値ある人間として認められていると感じています。）
→自分は、まわりの人からみとめられている（たよりにされている）と思う。

他者からの受容感①
（自分は、集団の中で受け入れられていると感じています。）
→まわりからは、自分の気持ちを分かってくれると思う。

他者からの受容感②
（集団の中で安心して自己開示できると感じています。）
→自分の考えや意見をまわりの人に安心して伝えることができる。

自己受容感
（悪いところも含めて、自分をありのまま肯定的に受け入れることができている。）
→自分のことがすきだと思う。

心のアンケートⅠ 月 日

組 番 名前

☆これから、いくつかの質問をします。一つ選んで○をつけましょう。

これはテストではありません。自分がどう思うか、どう感じるかということなので、正しい答えやまちがった答えというのではありません。あまり深く考えずに、感じたままを答えてください。

1 自分にはよいところがあると思う。 <small>(とてもそう思う そう思う あまりそう思わない 全くそう思わない)</small>	
2 がんばっていることがある。 <small>(とてもそう思う そう思う あまりそう思わない 全くそう思わない)</small>	
3 自分には、がんばってやりとおす力があると思う。 <small>(とてもそう思う そう思う あまりそう思わない 全くそう思わない)</small>	
4 できるようになったと思うことがある。 <small>(とてもそう思う そう思う あまりそう思わない 全くそう思わない)</small>	
5 これからがんばりたいと思っていることがある。 <small>(とてもそう思う そう思う あまりそう思わない 全くそう思わない)</small>	
6 自分はまわりの人の役に立っていると思う。 <small>(とてもそう思う そう思う あまりそう思わない 全くそう思わない)</small>	
7 自分はまわりの人からみとめられている（たよりにされている）と思う。 <small>(とてもそう思う そう思う あまりそう思わない 全くそう思わない)</small>	
8 まわりからは、自分の気持ちを分かってくれると思う。 <small>(とてもそう思う そう思う あまりそう思わない 全くそう思わない)</small>	
9 自分の考えや意見をまわりの人に安心して伝えることができる。 <small>(とてもそう思う そう思う あまりそう思わない 全くそう思わない)</small>	
10 自分のことがすきだと思う。 <small>(とてもそう思う そう思う あまりそう思わない 全くそう思わない)</small>	

…ありがとうございます。うらへつづきます。

図3 心のアンケートⅠ

(2) 「心のアンケートⅡ」(図4)

自由筆記により、子どもたちが自分のよさについてどのように感じているのかを把握したいと考えた。何も書かない（書けない）子どもがいた場合も、そのままよいことを伝えるようにする。

心のアンケートⅡ 月 日

組 番 名前

☆自分のいいところ（すきなところ）を書きましょう。

いくつでもいいです。
イラストつきでもいいですよ。

.....

.....

.....

.....

図4 心のアンケートⅡ

3 「心のアンケート」の分析と授業づくりの考察

A小学校第6学年1学級31名を対象に、「心のアンケート」を実施した。(平成19年10月17日)

(1) 「心のアンケートⅠ」について

児童の回答から、自尊感情の各領域について「とてもそう思う」3点、「そう思う」2点、「あまりそう思わない」1点、「全くそう思わない」0点として換算し、学級全体の指数平均を求めた(図5)。

指数が高かった領域は、「自己決定感」

(これから、がんばりたいと思っていることがある)、「自己充実感」(がんばっていることがある)、「自己成長感」(できるようになったと思うことがある)などである。いずれも、「自分から見た自分」に関する領域である。

逆に、指数の低かった領域は、「自己

有用感」(自分はまわりの人の役に立っていると思う)、「自己存在感」(自分はまわりの人から認められていると思う)である。このように、「他者から見た自分」についての領域では自信をもてずにいることがうかがえる。

さらに、「自分から見た自分」に関する領域の中でも、「自己効力感」(自分には、がんばってやり通す力があると思う)が、やや低くなっていることにも注目したい。学校生活の中で、児童が自己実現を目指す上でのエネルギーになっていく大切な領域であるので、より一層高めていく必要があると思われる。

(2) 「心のアンケートⅡ」について

「心のアンケートⅠ」で、高い自尊感情指数を表している児童ほど、自分のよいところ(すきなところ)を数多く書き出している。また、数は少なくとも、「あきらめない気持ちがある」「努力をしている」「あいさつができる」「友だちをはげましている」など、自分の能力だけでなく、具体的な行動に対しても肯定的な評価をしている。そして、自分のよいところとして、「友達が多い」「友達に人気がある」など、他者とのかわりに関することをあげている児童も見られる。

一方、「心のアンケートⅠ」で低い自尊感情指数が表れた児童は、自分のよいところを書くことが難しかったようである。記述の量が少なく、内容は「〇〇が得意」というような能力にかかわることのみを書くなど、自分のよいところを多面的にとらえることができていない。何も書かなかった児童は31人中3人で、「自己有用感」「自己存在感」「自己受容感」が低い点が共通している。

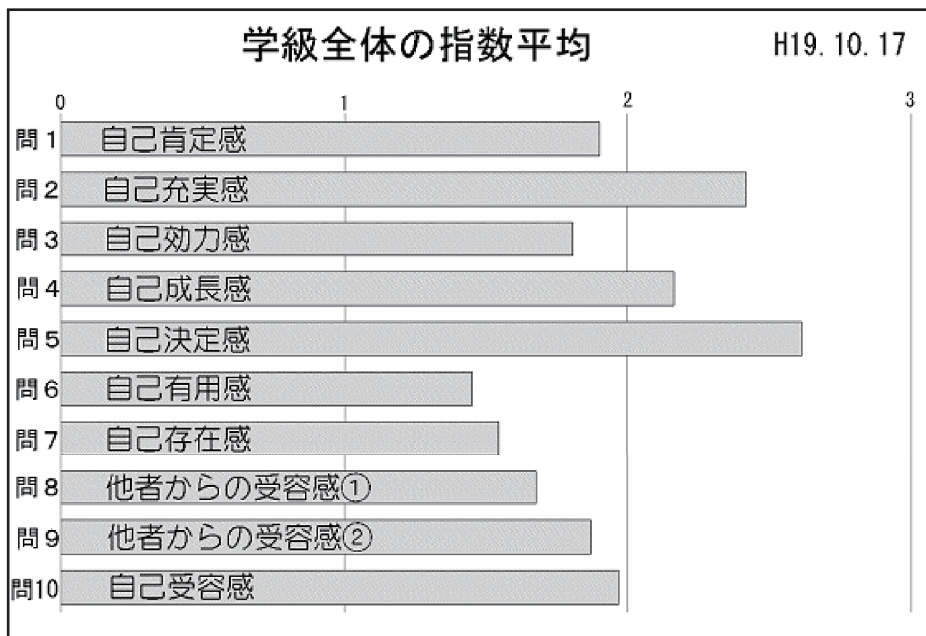


図5 心のアンケートⅠ(平成19年10月17日実施)

4 自尊感情を高めるための授業実践

「心のアンケートⅠ・Ⅱ」の結果を受けて、表1のような授業実践をした。

表 1 自尊感情を高めるための授業実践

	主題名・内容項目・資料など	高めたい 自尊感情の領域	授業づくりのポイント
実践 1 (1時間)	主題名 希望をもってやり抜く心 1-(2)理想・努力 資料名 「夢に向かって」 自作	○自己効力感 自己決定感	・自作資料の作成 ・G Tの活用
実践 2 (2時間)	主題名 自分の役割 4-(1)責任・役割 資料名 「ぼくの仕事は便所そうじ」 文溪堂 6年	○自己有用感 ○自己存在感 ◎他者からの受容感 自己充実感 自己肯定感	・自分を見つめる活動 ・友達のがんばりを認め合う活動 ・構成的エンカウターの活動と組み合わせて(2時間扱い)
	※学級活動 (1時間) 「自分へのがんばり賞」		
実践 3 (1時間)	主題名 かけがえのない命 3-(2)生命尊重 資料名 「たったひとつのたからもの」 書籍・HPより	○自己存在感 自己有用感 他者からの受容感 自己成長感 自己決定感 ◎自己受容感	・自作資料の作成 ・保護者との連携(幼い頃の写真・手紙の依頼など)

実践 1

対象：A小学校 第6学年 95名

日時：平成19年11月20日

- (1) 主題名 希望をもってやり抜く心 1-(2)理想・努力
- (2) 資料名 「夢に向かって」

※本資料は、平成19年11月5日「朝日新聞フロントランナー」・HP「今井浩恵社長ブログ」をもとに自作したものである。あらすじは、次のとおりである。

「わたし」は、就職説明会で先代の社長から将来の夢についての話を聞き、入社を決意する。熱心に働き、仕事をひととおり覚えた6年後、先代社長に依頼され、苦難の多い社長の仕事を引き受けることになる。その後、会社は売上を伸ばし急成長することができた。今でも、ラオスの学校建設という夢に向かって、計画を進めている。

- (3) 主題設定の理由

将来の夢をもち、希望をもつことで、人は前向きに明るく生きていくことができる。また、その夢の実現に向けて、困難にくじけず最後まで粘り強くやり抜くことも人として大切なことである。

「心のアンケートⅠ」では、「これからがんばりたいと思っていることがある」と答えた子が多く、「自己決定感」が高いことが分かった。しかし、「自分には、がんばってやり通す力がある」と答えた児童はやや少ない。理想をもってがんばろうと思う反面、やり通すことに自信がなく、「自己効力感」がもてずにいる姿が表れている。

このような児童に、希望をもって自分の将来を見つめさせ、その夢の実現のためには、努力することが必要であることを理解させたいと考えた。そこで、新聞記事の今井浩恵氏や、ゲストティーチャーの白バイ隊員の方など、前向きな生き方をしている実在の女性を紹介することとした。

(4) 本時のねらい

将来に対する希望や夢をもち、それに向かって努力しようとする心情を育てる。

(5) 学習の流れ

<p>1 将来の夢について話し合う。</p> <p>2 資料「夢に向かって」を読み話し合う。</p> <p>○どうして「この社長の下で働きたい。」という思いをもったのだろう。</p> <p>◎「会社を辞めるか、社長になるか、どちらかにしてくれ。」と言われたとき、どんなことを思っただろう。</p> <p>3 白バイ隊員、深田さんの話を聞く。</p> <p>4 感想を発表し合う。</p>	<p>○事前調査を基に全体の傾向について軽くふれる。</p> <p>○事前に一読させておく。</p> <p>○「人との出会い」に着目させる。</p> <p>○信頼されて嬉しい気持ちと不安な気持ちという二つの気持ちの間で揺れ動く主人公の心情に気付かせる。</p> <p>○きっかけは先輩女性隊員との出会い、白バイ隊員になるまでの努力など、資料とよく似た視点から詳しくお話ししていただく。</p> <p>○自分の将来に思いをはせながらしっかりと書く時間を保障し、発表し合うことで、一人ひとりの夢・希望をふくらませて授業を終わりたい。</p>
---	--

(6) 授業を振り返って

① 自作資料について

人との思いがけない出会いによって、将来の夢をもつことになった「わたし」の心情や、努力して夢を叶えていく姿に、漠然とした将来の夢をもち始めている子どもたちは共感を覚えたようである。

児童の感想より

- ・ぼくには、今、はっきりとした夢がありません。けれど、今井さんのように最初はこれといって夢がなかった人でも、だれかに出会ったことで夢をもつことがあると聞いて、ぼくにもそういう人との出会いがあるんだろうなあと思いました。人に優しくして、人との出会いを大切にしないといけないと思います。
- ・将来の夢は、もっと大人になってから決めてもいいことが分かりました。自分に自信をもっていきたいです。わたしも何か夢をもってみようと思いました。
- ・「失敗したって、だまされたって、やらないことが一番の悪」という言葉が心に残りました。叶わない夢かもしれないけれど、自分でいろんな努力をしてみたいと思いました。

② ゲストティーチャーの活用について

福井県で2人目の女性白バイ隊員であるF氏をゲストティーチャーとしてお招きした。児童に直接語りかけていただくF氏の話は、生きた言葉として児童の心に深く響くと考えたからである。資料と関連させながら、やろうと思えば夢は実現できるという内容を中心に話をしていただいた。児童は、資料を読むだけではとらえにくかった主人公の思いを深くくみ取り、ねらいとする価値に迫ることができたと思う。「自己効力感」「自己決定感」の高まりが伝わってくる感想が多かった。

児童の感想より

- ・ぼくは、白バイ隊のFさんのお話を聞いて、夢っていいなあと思いました。夢があることによって、人ってこんなに変わることができるんだと思ったからです。
- ・今井さんやFさんが自分で夢を実現していく、そういう話が一番印象に残りました。わたしも、夢に向かってがんばっていったらいいです。
- ・簡単にはあきらめず挑戦して努力をする人はすばらしいと思いました。ぼくは、夢をもつことで自信がもてるようになりました。夢に向かってあきらめず挑戦を積む人になります。努力をすれば報われる。この言葉を大切にしたいです。

・わたしは、今井さんやFさんとちがって、自分のすることに自信がもてないから、常に人が正しいと思っ
てしまい、人に流されてしまいます。二人は、みんなの反対を押し切る勇気があって、なおかつ、その目
標をあきらめずに努力して、成功させるねばり強さがありました。これからは、夢をもつことで、どんど
ん自分を成長させていきたいです。そして、自分に自信をもって夢に挑戦したいです。

実践 2

対象：A小学校 第6学年A組 31名

日時：平成19年12月19日 ※第1時 道徳、第2時 学級活動

- (1) 主題名 自分の役割 4-(1)責任・役割
- (2) 資料名 「ぼくの仕事は便所そうじ」 文溪堂『6年生の道徳』
- (3) 主題設定の理由

人は、それぞれ、その人固有の役割を担って生きている。子どもたちも、家庭、学校（学級）、地域社会の一員として役割があり、その責任を果たしながら生活している。役割を果たす満足感は自信となり、前向きに生きていく力となる。また、責任を果たすことで相互の信頼感や集団への所属感が高まり、よりよい人間関係を築いていくことができると考える。

「心のアンケートI」では、「自分はまわりの人の役に立っていると思う」「自分は、まわりの人から認められている（頼りにされている）と思う」という質問項目について、学級全体の平均指数が最も低くなっている。自分なりにがんばっていることがあると思う反面、他者からの評価については自信がなく、「自己有用感」「自己存在感」がもてずにいる姿が表れている。

このような児童に、自分には役割があること、それを実際に果たしているということに気付かせ、これからも自信をもって責任を果たしていこうとする心情を育てたいと考えた。

- (4) 本時のねらい
自分の役割について考え、集団の中での位置付けや役割を自覚し、主体的に責任を果たそうとする心情を育てる。
- (5) 学習の流れ

<p>(第1時 道徳)</p> <p>1 自分の仕事・役割について話し合う。</p> <p>2 資料「ぼくの仕事は便所そうじ」を読み話し合う。</p> <p>○「ぼく」は初めどんな気持ちで便所掃除をしていたのだろう。</p> <p>◎やる気になったのはどうしてだろう。</p> <p>○「ぼく」は便所掃除からどんなことを学んだのだろう。</p> <p>3 自分の役割を果たした体験について話し合う。</p> <p>4 第1学年担任からの手紙を聞き、本時の感想を書く。</p>	<p>○自分が様々な役割を担っていることに気付くようにする。</p> <p>○自分のふだんの仕事の苦勞と重ね合わせながら、嫌々やっているときの主人公の気持ちに共感できるようにする。</p> <p>○誰かのためになっていることへの気づきが意欲へとつながったことが分かるように、板書を工夫する。</p> <p>○集団の一員としての役割という視点について、助言する。</p> <p>○ワークシートを活用し、自分の役割についてじっくり考えることができるようにする。</p> <p>○6年生への感謝の手紙を読み聞かせる。</p>
<p>(第2時 学級活動「自分へのがんばり賞」)</p> <p>1 グループ作りをする。</p>	

<p>2 ワークシートに自分が役割を果たそうとがんばっていることを記入する。</p>	<p>○リーダーでなくても集団の一員としての役割があることを伝える。</p>
<p>3 ワークシートを交換し、友達のがんばっていることを記入し合う。</p>	<p>○相互評価をすることで、受容感や所属感を感じながら自信を高めることができるようにする。</p>
<p>4 戻ってきたワークシートにシールを貼り、自分へのがんばり賞を完成させる。 ・うれしかったところ ・気に入ったところ</p>	<p>○これからも進んで役割を果たすよう励ます。</p>

(6) 授業を振り返って

① 自分を見つめる活動について

資料の「ぼく」の言動から、責任を果たすとはどういうことなのかをじっくり考え、発表することができた。しかし、自分の生活をふり返る場面では、思い当たらない児童が多かった。

6年生の児童は、委員会活動やたてわり班活動、清掃活動、集団登校など、学校全体の中心として日常的に様々な仕事をしている。また、友達同士や家族との関係においてもかけがえのない役割があるはずである。しかし、役割を果たしているという自覚があまりなく、責任感や満足感を実感できずにいるようであった。

ワークシートを記入しながら、自分を見つめる時間を確保することで、ふだん、当たり前のようにしている活動が誰かのためになっていること、そして自分は大切な役割を担っているということにだんだん気付いていったと思われる。

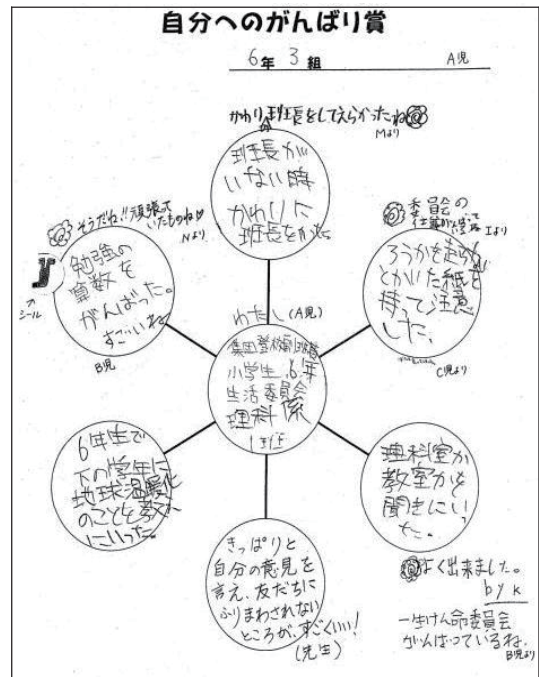


図6 実践2で使用したワークシート

児童の感想より

- ・今考えると、いろんな役割を果たしているんだなあと思いました。もっと自分からあいさつしたり、発表したり、委員会や係の仕事をがんばってやったりしようと思いました。
- ・自分で自分のがんばったことを思い出すと、思ったよりたくさん出てきました。
- ・今日の授業でわたしにもたくさんの役割があるし、がんばらなくてはいけないことがたくさんあることが分かりました。これからも役割を増やして、精一杯がんばろうと思いました。

② 友達のがんばりを認め合う活動について

第2時で、他者からの感謝の言葉や励ましの言葉を書いてもらったことによって、役割を果たす意欲が高まり、第1時の資料の「ぼく」への共感が深まったように見受けられた。「自己有用感」「自己存在感」「他者からの受容感」の高まりが伝わってくる感想が見られた。

児童の感想より

- ・自分が見つけれなかったことを友達は見つけてくれたので、みんな見ているんだなと思いました。これからも、自分の役目をがんばっていきたいと思います。
- ・自分で自分のがんばったことを見つけるのは大変で、少ししか見つけられませんでした。でも、他の人がたくさん見つけてくれて、やりがいを感じました。これからもがんばろうと思いました。

・自分で気付いていなかった役割が少しだけ分かったような気がしました。これからは、自分の役割をちゃんと見つめ直して、やらなければいけないことにしっかり取り組もうと思います。

実践 3

対象：A小学校 第6学年A組 31名

日時：平成20年2月20日

- (1) 主題名 かけがえのない命 3-(2)生命尊重
- (2) 資料名 加藤浩美著「たったひとつのたからもの一息子・秋雪との六年」文藝春秋刊より自作
 ※これは、105枚の写真と母親の文章による、秋雪さんと家族との6年間の記録である。本時では、フォトコンテストで入賞した「たったひとつのたからもの」というタイトルの写真を中心資料とした。息子を抱きしめている父親の気持ち、撮影した母親の気持ちが伝わってくる作品である。また、母親の文章の一部を引用してプリントにまとめ、補助資料として提示した。さらに、明治安田生命CM「たったひとつのたからもの」篇（VTR）を活用した。感動的な映像と音楽は、児童が温かく明るい気持ちで本時を振り返るようにする上で、効果的であると考えた。

(3) 主題設定の理由

自分の生命を大切に思う気持ちが、児童の「自己肯定感」「自己受容感」の育成につながると考え、本主題を設定した。「生命尊重」という価値項目には、生命の有限性、固有性、連続性など、様々なアプローチの仕方が考えられる。本時では、生命は家族に支えられていると同時に、家族の支えになっっていることに焦点を当てることによって、自分自身がかけがえのない存在であることに気付かせ、自分のこれからの生き方をしっかり見つめさせたいと考えた。

本時では、まず、資料から家族の深い思いを感じ取り、命の大切さを見つめさせたいと考えた。また、「心のアンケートⅠ」でポイントの低かった「自己有用感」「自己存在感」「他者からの受容感」を高めるため、保護者からの手紙を利用した肯定的な他者評価の場面を設定した。さらに、子どもたちが友達と思いを話し合う中で、他者の生命の尊さにも気付かせたいと考えた。

(4) 本時のねらい

生命は、家族に支えられたかけがえのないものであることに気付き、命を大切にしようとする心情を育てる。

(5) 学習の流れ

<p>1 本時は命について学習することを知る。</p> <p>2 「たったひとつのたからもの」について話し合う。</p> <p>○写真の中のお父さんは、どんな思いで秋雪くんを抱きしめているのだろう。</p> <p>○秋雪くんとともに生活して気付いたこととは、どんなことだろう。</p> <p>3 保護者の方からの手紙を読む。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・写真を撮ったときの思い ・これからについての願いなど <p>4 思いをあたためる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・CMのVTRを鑑賞し、感想を書く。 	<p>○写真の親子の表情から気持ちを読み取るとともに撮影した母親の思いにも目を向けるよう助言する。</p> <p>○悲しみだけでなく喜びも大きかったことが理解できるように、引用文を2回に分けて提示する。</p> <p>○ワークシートの空欄に当てはめる言葉を書くことで、「命を大切にする生き方」を考えさせる。</p> <p>○同封されている幼い頃の写真やメッセージから自分に対する家族の思いにふれ、自分の命についてじっくり考えることができるようにする。</p> <p>○映像と音楽を楽しみながら、本時を振り返る。</p>
---	---

(6) 授業を振り返って

① 自作資料について

本時では、引用文を2回に分けて提示した。「手がかり1」として、病気の宣告や子どもを失う辛い気持ちを、「手がかり2」として、子どもへの愛情が親としての生き甲斐であること、子どもが心の支えになっているということを順次伝えた。写真を手掛かりにしながら、著者の母親としての思いを深く読み取ることができ、命について考える資料として適切であったと思われる。実在の人物であることも切実な気持ちで取り組むために有効であった。

児童の感想より

- ・親は、子どもがただ生きていてだけでうれしいんだと分かりました。
- ・秋雪くんから、一生懸命生きようっていうことが伝わってきました。
- ・今日、命の授業をして、生きる、生きていくというのはいいなあと思いました。
- ・命は一生に一度のもので、同じ時間はなく、一日一日がいつもとちがうから、その一日を大切にしていきたいです。

② 自分の生き方を考える活動について

引用文の一部を空欄にして、どんな言葉が入るか自分なりに考える活動を取り入れた。

「これは、秋雪と共に生活して気づいたこと。 生きる。病気の人に限らず、すべての人間に言えること。」

児童は次のような言葉を記入していた。自分のこれからの生き方について、深く考えていることが読み取れる。本時のキーワードとして、児童の心に残ることを願っている。

- ・一生懸命に生きる。 ・命を大切に生きる。 ・たくさんの人とかかわり合いながら生きる。
- ・精一杯生きる。 ・一日一日を大切に生きる。 ・みんなと生きる。
- ・全力で生きる。 ・幸せを与えて生きる。 ・人と協力して生きる。

③ 保護者との連携について

本時では、保護者に依頼して、手紙と幼い頃の写真を準備した。日頃はなかなか口にされない保護者の思いを知り、自分と家族とのきずなについて改めて考えを深めたことが感想からうかがえる。

授業は保護者に公開し、事後の活動として、手紙の返事を書く活動を実施した。保護者からも、命について考える機会ができてよかったとの意見が寄せられた。

「他者からの受容感」とともに「自己肯定感」「自己受容感」も高まったことが、児童の感想に表れている。

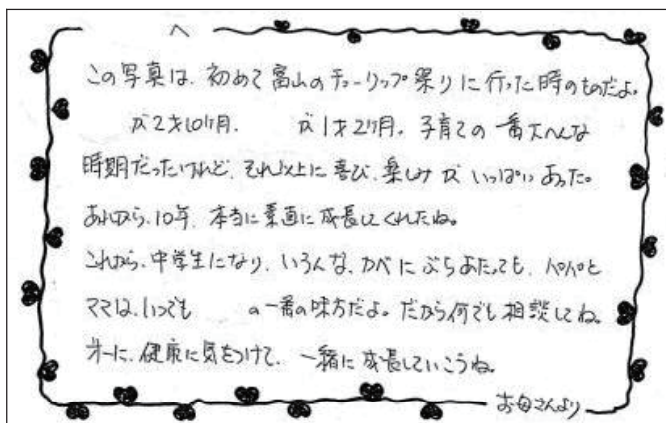


図7 保護者から児童への手紙

児童の感想より

- ・お母さんはいつも普通に接しているのに、手紙にはいつも言葉に出さないことを書いてくれて、とてもうれしかったです。
- ・お母さんから手紙をもらって、自分がこんなに小さい頃から役に立っていたことが分かりました。今のわたしを考えるとわがままを言ったりする時があり、とても恥ずかしいです。これからは、自分のことだけでなく家族、友達を大切に、あきらめずに生きていきたいです。

- ・わたしはこの頃、親に生意気な口をきいてしまうことがあるけれども、どんなときでも、たくさんの人に支えられて生きているということを忘れてはいけなかったと思います。
- ・今日の授業で生命の大切さがよく分かりました。自分がこの一瞬一瞬を生きていられることを父母に感謝します。これからも、一分一秒を大切に生きたいです。

5 実践後の「心のアンケート」における児童の変容

(1) 学級全体としての変容について

授業実践後、再び「心のアンケート」を実施した（平成20年2月25日）。「心のアンケートⅠ」の回答から、自尊感情の各領域について学級全体の指数平均の変化を調べた（図8）。

10月に比べて、指数が高くなった領域は、「自己充実感」「自己効力感」「自己成長感」などで、いずれも、「自分から見た自分」に関する領域である。

しかし、「自己有用感」「自己存在感」「他者からの受容感」については、実践前より指数が低くなってしまった。これらは、「他者から見た自分」に関する領域である。

そして、「このような自分をどう受け止めるか」という領域の「自己肯定感」「自己受容感」は高まっており、自己を肯定的に評価し、受け入れることができるようになった児童が増加したことが分かった。

自尊感情の全体的な育成ということでは、一定の成果を得られたように思われる。しかし、自尊感情を育てていくためには他者とのかかわりが重要であると再認識させられた。授業の中で、児童が周囲からの受容を認識できるようにする手だてをより一層工夫する必要があると考える。

「心のアンケートⅡ」については、授業実践実施前に比べて、自分のよいところをたくさん見つけることができるようになった児童が多くなった。また、よいところとして取り上げている内容も、「…できる」「…が得意だ」という能力に関するものから、「人に優しくしている」「笑顔で元気がよい」「宿題を忘れない」など情意面、生活面にも広がってきたことが、特徴としてあげられる。

(2) 個別の児童の変容について

「心のアンケートⅠ」における一人ひとりの指数の変化は、個別の児童理解にも役立った。

図9は、授業実践前「心のアンケートⅡ」に自分のよいところを何も書かなかったA児の指数の変化を表したグラフである。実践前に比べて、「自己充実感」「自己成長感」「自己有用感」「自己受容感」が高まっていることが分かる。授業直後には、「みんなが自分のがんばっていることを書いてくれてよかった。先生もコメントを書いてくれた」「お母さんからの手紙を読んで、家族のために生きようと思った。自分を生んでくれた人に感謝しようと思った。一生懸命に生きたい」と書いている。

しかし、授業実践後も「心のアンケートⅡ」に自分のよいところを書いていない。これらの自尊感情に関する調査結果を基に、A児への今後の支援の在り方を検討していく必要があると考える。

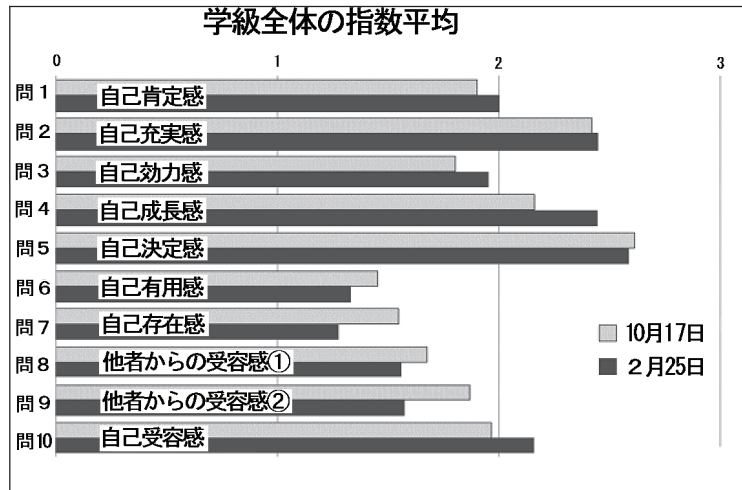


図8 授業実践後の「心のアンケートⅠ」の変化

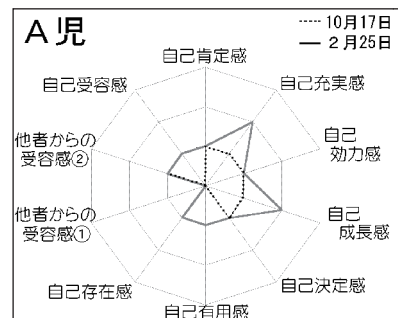


図9 A児の変容

V 研究のまとめと今後の課題

1 研究の成果

- ・「心のアンケート」を実施したことによって、児童一人ひとりの自尊感情を詳しく調査することができ、児童支援に役立てることができた。また、学級全体としての傾向をつかむことができ、伸ばしたい領域に的を絞った授業づくりをすることができた。三つの授業実践は、児童の発言や授業後の感想などから、自尊感情を高める上で効果があったと思われる。
- ・「心のアンケートⅡ」によって、子どもたちが、自分のよいところをどのように感じているかを把握することができた。アンケートに記入すること自体が、自分を多面的に評価したり自分の成長している点に目を向けたりすることになり、自分に自信をもつことに役立ったようである。

2 今後の課題

- ・「心のアンケートⅠ」を授業実践の前後で比較分析した結果、学級全体の自尊感情指数に大きな伸びは見られなかった。授業実践の中では、子どもたちの心に響いたという手応えを感じる場面があったが、児童の意識を変容させることまではできなかった。自尊感情は一朝一夕に育成できるものではないことを改めて痛感させられた。
- ・これからも自尊感情を高める道徳の授業づくりに努め、子どもたちの心が夢や希望に向かうようにしていきたい。各教科の学習活動、特別活動、学校行事など、学校における教育活動全体の中で、根気よく働きかけを続けていくことが大切である。本研究では、道徳の時間の授業づくりを中心に組み込んだが、今後は、道徳の時間をより充実させるため、学級活動における構成的エンカウンターやスキルトレーニングなどの効果的な活用について、研究を進めていきたい。
- ・平成20年に告示された新しい学習指導要領においては、言語活動の充実が重視されており、道徳の時間の指導においても言葉を生かし考えを深める工夫が求められている。『小学校学習指導要領解説道徳編』には、温かく受容的な雰囲気の話し合い活動とともに、自己内対話、例えば、児童が想定したもう一人の自己に問いかけて考えを深める活動の工夫などにより、自分の考えを明確にさせていくことも重要であると記されている(文部科学省2008)。これは、自尊感情をはぐくむことと深くかかわっている。道徳の時間が「自分を語り合う時間」となるよう、効果的な言語活動を工夫していきたい。

研究協力校の先生方には、お忙しい中、多大なる御協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

《引用文献》

- 文部科学省(1998)『小学校学習指導要領(平成10年12月)』国立印刷局、p91
- 文部科学省(1999)『小学校学習指導要領解説(道徳編)』国立印刷局、p12、p27
- 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽編(1992)『セルフ・エスティームの心理学—自己価値の探求—』ナカニシヤ出版、p12、pp. 18-19
- E. アンダーソン・G. レッドマン・C. ロジャース著、荒木紀幸監訳(1999)『親から子へ幸せの贈りもの—自尊感情を伸ばす5つの原則』玉川大学出版部、pp. 216-225、
- 文部科学省(2008)『小学校学習指導要領解説 道徳編』東洋館出版社、pp. 95-97

《参考文献》

- 荒木紀幸(2007)『教育心理の最先端—自尊感情の育成と学校生活の充実—』あいり出版
- 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽編(1992)『セルフ・エスティームの心理学—自己価値の探求—』ナカニシヤ出版
- 清水保徳・松井敏編著(2007)『小学校 セルフエスティームを育てる道徳授業 高学年編』明治図書
- 明治図書(2006)『道徳教育 12月号 No.581 [特集]「セルフエスティーム」を育てる』
- 文部科学省(1998)『小学校学習指導要領(平成10年12月)』国立印刷局
- 文部科学省(1999)『小学校学習指導要領解説(道徳編)』国立印刷局
- 八巻寛治・吉澤克彦編(2007)『エンカウンター実践テキスト7号 自尊感情を育てるエクササイズ集』明治図書